

雲岡古墳発掘調査報告書

—香川県豊浜町における終末期古墳の発掘調査—

1987年9月

豊浜町教育委員会

雲岡古墳発掘調査に思う

自分たちの国が、郷土が、いつ、どのようにして誕生したのか。これは、時代のいかんを問わず、私ども一人一人が心の奥深く懷いている関心事であります。古代史が私たちの心をとらえるのもそのためであります。

当町の遺跡「院内貝塚」が、縄文時代への思いをかきたて、大平木より出土したタココツボ式土器、五十鈴神社周辺に存在したといわれる古墳群が、それぞれ弥生時代、古墳時代をしのぶよすがとなることは、皆様ご承知のとおりであります。

古代遺跡の発掘調査は、単に、そうした私どもの関心や疑問にこたえるためのものとしてだけでなく、その時代に生きた先人の努力や知恵に学び、現代及び未来にむけてどう生きるかの示唆を得るところに大きな意義があると存じます。

今回、町内雲岡周辺の土地改良事業推進にあたり、県下でも珍らしいといわれる古墳時代終末期の方墳発掘を見たことは、町誌に新しい1ページを加えることとなり歓びにたえない次第であります。

院内につづく雲岡丘陵地帯に私どもの先祖が居住し、海の幸、山の幸に加えて野の幸を得べく、嘗々として荒地の開拓を進めたであろうその姿を想像いたしますとき、先人への敬然の情ひとしおなるものがあります。こうした活力に学びつつ、全町民一丸となって来るべき21世紀へむけ、町発展のためのいしづえを築いてまいりたいと存じます。

ともあれ、本発掘調査にあたり、地権者平井武男氏ならびに周囲の地権者の方々のご協力、県教育委員会のご指導に対し心から感謝申しあげ、ごあいさつといたします。

昭和62年9月1日

豊沢町長 合田 増太郎

雲岡古墳の発掘調査に寄せて

私たちの住む豊浜町は、香川県の西南端に位置して愛媛県に接し、県境にそびえる大谷山と高尾山を主峰とする山地は、町の面積の6割近くを占めています。残余の土地は、わずかな起伏はあるものの全体的には平地を形成し、その中央部を吉田・白坂の両川が流れて灌漑の中心となっています。

この土地に、いつごろ人が住みつき、どのような変遷をたどって今日に至ったのでしょうか。町誌(昭和49年版)によると、次のように記されています。

縄文時代……大平木・岡・道溝・梶谷は、一帯に海浜であり、院内の獅子ヶ鼻付近は海辺台地で、当時、すでに縄文時代人が住んでいたことは、同地の貝塚の発見によって立証されています。

弥生時代……大平木から弥生式土器系統のタコツボ式土器30個ぐらいが発見されることから、この時代この地に先住民のいたことが推測されます。

古墳時代……和田の五十鈴神社背後およびナマコ状に突出した台地に、この時代のものと思われる古墳が、併せて約10基あったといわれていますが、未調査のため全貌は明らかになっていません。

今回、発掘調査を実施した雲岡古墳は、高尾山から三豈平野にむかってなだらかに続く丘陵を切り拓いた水田の中に位置し、径10m、高さ1mほどの雑草の繁る小盛土で、古米地元住民から「お塚」と呼ばれていたものです。

折しも、この地一帯が団体営土地改良総合整備事業で削平されることになり、盛土を約1m掘削したところ、石組み造構が現れたため、昭和61年9月18日現地視察を実施しました。その結果、重要な遺跡であることが推定されたので、県教委指導のもと正式な発掘調査を実施した次第です。

調査結果の詳細は本文にゆずるとして、本古墳は、古墳時代終末期の方墳で県内でも他に類例のない珍らしいものでしたので、調査終了後同地に石室を復元するとともに町指定有形文化財第8号としての手続きを完了し、出土品は文化会館に展示しました。

町内の他の文化財とともに雲岡古墳を大切に保存していくよう全町の皆様のご協力を
お願いいたします。

なお、最後になりましたが、今回の発掘調査に当たり、終始ご熱心にご指導賜りました
県教育委員会文化行政課國木健司先生並びにご協力いただきました関係者各位に厚く御
礼申しあげます。

昭和62年9月1日

豊浜町教育委員会教育長 萩田 幸男

例　　言

1. 本書は香川県三豊郡豊浜町所在の雲岡古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は香川県教育委員会文化行政課技師國木健司の指導のもと、豊浜町教育委員会が主体となって実施した。
3. 調査期間は1986年10月6日から10月19日までの実働9日間である。
4. 調査に際しては豊浜町文化財保護協会有志の方々に御尽力いただき、また遺物の整理復元については四国学院大学生新卓志保子、土岐悦子の援助を得た。
5. 本書の作成に際しては、次の方々に御助言をいただくとともに資料提供や編集の面で多大な御指導、御援助を得た。

大阪大学文学部助教授	都 出 比呂志氏
文化庁文化財保護部記念物課調査官	山 崎 信 二氏
香川県教育委員会文化行政課文化財専門員	廣瀬 常 雄氏
〃	渡 部 明 夫氏
〃 技師	大久保 徹 也氏

6. 本書挿図中のレベル高はすべて海拔を表わす。
7. 図版の一部に国土地理院発行の50,000分の1「観音寺」を使用した。
8. 本文の執筆、編集は國木が担当した。

本 文 目 次

	頁
第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 調査の経過.....	1
第3章 立地と環境.....	3
第4章 調査の結果.....	5
(1) 墳丘と周溝.....	5
(2) 横穴式石室.....	6
(3) 遺物.....	11
(4) 小括.....	15
第5章 まとめ.....	16
(1) 排水溝について.....	16
(2) 石室構築法について.....	19
(3) 宮岡古墳の築造年代とその占める位置.....	20

挿 図 目 次

頁

第1図 発掘調査風景.....	1
第2図 周辺の遺跡地図.....	4
第3図 遺構配置図.....	5
第4図 周辺の地形図.....	7
第5図 石室尖洞図.....	7
第6図 排水溝検出状況.....	9
第7図 排水溝完掘状況.....	9
第8図 石室完掘状況.....	10
第9図 碓床下遺物出土状況.....	11
第10図 碓床上遺物出土状況.....	11
第11図 石室内遺物出土状況.....	12
第12図 遺物実測図.....	14
第13図 石室構築過程写真.....	19

付 表

石室構築過程

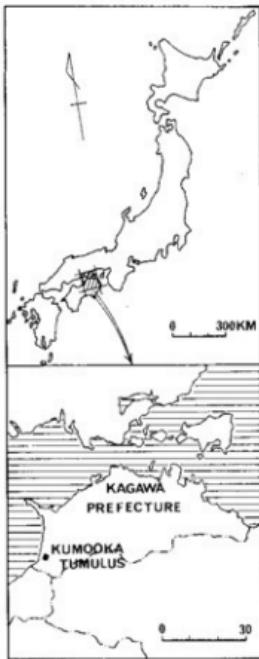
図 版 目 次

頁

図版 1	1	図版 5	5
古墳周辺の航空写真		(1) 碓床下遺物発見状況	
図版 2	2	(2) 同碓床除去後	
(1) 古墳調査前（北西より）		図版 6	6
(2) 古墳調査前（南西より）		(1) 石室石組み除去後（北から）	
図版 3	3	(2) 同上	
(1) 石室検出状況全景		図版 7	7
(2) 石室近景		(1) 周溝と全景（北西より）	
図版 4	4	(2) 周溝と全景（南西より）	
(1) 石室奥壁		図版 8	8
(2) 石室側壁		雲岡古墳出土土器	

雲岡古墳

発掘調査報告書



第1章 調査に至る経過

雲岡古墳は三豊郡農浜町和田甲1634番地に所在する。旧状は雑草の生い繁る直径10m、高さ約1mほどの半球状を呈する小盛土であった。これまで遺跡台帳に記載されておらず、また遺物の出土も伝えられていないため公には知られなかったが、丘陵を切り拓いた水田の中で後世の掘削、土盛り等を受け様々に姿を変えながらも、古来、地元住民の間では「お塚」と呼ばれて畏敬の対象としての命脈は保ち続けていた。

当該地が昭和61年度の団体営土地改良総合整備事業の対象となり、古墳が比高差約1mの水田の丁度境界付近に位置するため、事業推進上盛土部分が削平されることになった。確認が遅れたことは惜やまれるが、ともかくも工事実施中に盛土を約1m掘削したところ石組みが露呈したために、町教育委員会より県教育委員会に連絡があり、昭和61年9月18日県教育委員会の職員による現地視察が実施された。その結果、石組みが重要な遺構であることが推定されたため、その内容・性格等を確認するため県教育委員会の指導のもと町教育委員会が主体となって発掘調査を実施するに至った。

第2章 調査の経過

調査前の段階で墳丘の大部分と石室の覆土が掘削されており、側壁及び奥壁の石組み外面がすでに露出している状態であった。従って、調査のポイントは石組み内埋土を除去し、石組みの性格を明らかにする点にしばられていた。

石組み内埋土を約50cm掘り下げる、一面に礎を敷きつめた状況が確認され、その礎上から須恵器片を検出したため立石の状況と併せてこの遺構が横穴式石室であることが判明した。この時点で現地での保存について土地所有者と協議を重ねたが、土地利用上問題が多く不可能ということになった。しかしながら、町内では確認された初めての古墳でもあり社会教育上意義が高いと思われたため、石室を移転復元するという方向で調査を進めることになった。

以下、調査日誌を略述して調査の跡をたどることにする。なお、石室外を精査中に井戸及び埋甕等を検出している。井戸については90歳を越える地元の長老がその所在を御存知なく、付近の開拓が江戸時代であったと言われていることから近世に構築されたものと思われた。径約2m、深さ約5mをはかり、地表下約1mのところに丸太材による木枠を施している。また、下に行くほど広がる断面形態で、壁面には石を積んで擁壁をしている。その他の遺構については詳細は不明であった。

(調査日誌)

- 昭和61年10月6日(月) 調査開始、石組み内埋土の掘り下げ。
礫床と須恵器片を検出し、周囲の立石とあわせて横穴式石室であることが判明した。
- 10月9日(木) 磯床、側壁石の清掃終了。写真撮影
- 10月12日(日) 磯床、奥壁・側壁石実測
- 10月15日(木) 磯床取り上げ実施、その下より須恵器が一括出土。
- 10月16日(金) 側壁石取りはずし、テラス状施設の上に据えつけられていることが判明。
周囲を精査中に排水溝検出。
- 10月17日(土) 重機により石室周囲の耕作土を除去。
周溝検出。石室石材除去後の写真撮影と実測。石室床面盛土をたち割り。
- 10月18日(日) 周溝精査、須恵器片出土。
- 10月19日(月) 平板測量。周溝内埋土の土層断面実測。
石室外排水溝の実測。
現場作業終了。



第1図 発掘調査風景

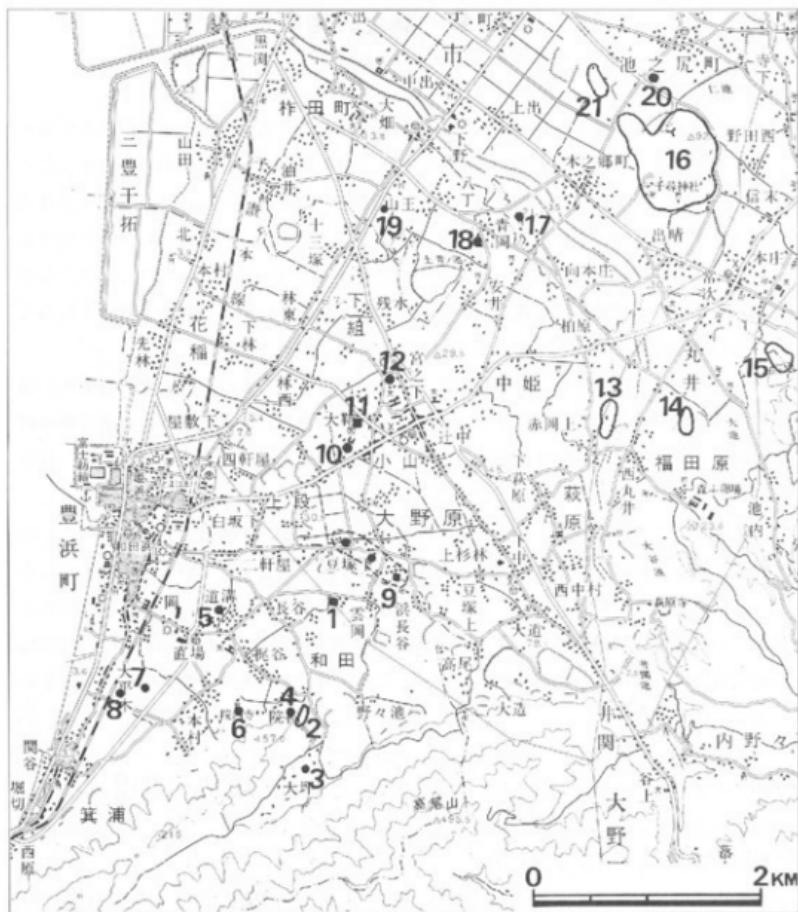
第3章 立地と環境

豊浜町は香川県の西端に位置し、東は瀬戸内海の燧灘に面し、南は高尾山から大谷山にかけて東西に連なる標高500m前後の山々を挟んで大野原町及び愛媛県川之江市に接している。南の山丘からは北に向かって幾筋かの低丘陵が派生し、それらを縫うように数条の小河川で流れている。また、現在の海岸線は長い間の砂の堆積によって徐々に形成された砂州があり、古くはかなり内陸まで海が湾入していた地域であった。従って、現在は低地部分のみならず、低丘陵地に田畠が広がっているものの、往昔には水田耕作による生産力はそれほど望めない地域であったと思われる。

雲岡古墳は先述の高尾山より北に延びるなだらかな丘陵の先端付近に立地している。古墳より北西から西にかけての方向には和田浜から燧灘にかけての眺望が開かれ、南西には吉田川のせせらぐ谷筋を隔てて縄文時代前期に形成された院内貝塚及び台山古墳の所在する台山の丘陵を望むことができる。また、北方向には狭い谷筋を隔てて大野原町豆塚古墳群の立地する低丘陵を望むことができるが、より以北への遠望は利かない。

豊浜町内に所在する遺跡としては、先の院内貝塚、台山古墳、さらに平安時代の須恵器窯跡と思われる大坪窯跡、中世に築造されたであろう大木塚等が知られている。しかしながら、雲岡古墳と直接関連づけられるのは不確定要素の強い台山古墳のみであり、むしろ北に隣接し立地状況も類似性の強い大野原町豆塚古墳群との関連が注目される。豆塚1号墳は1辺10m余の方形を呈するマウンドを有し方墳の可能性が強いと思われるが、2、3号墳についてはほとんど原形を留めておらず詳細は不明である。

大野原町内の低地には、巨石墳として著名な3基の古墳が所在している。それらは石室の形態から楕円墳→平塚→角塚の順に6世紀後半から7世紀中葉にかけて継続的に營まれたと考えられるが、同時期にあっては隔絶した石室規模を有しており、周辺地域を包括する首長クラスの古墳であろう。さらに以北の作田川周辺地域に至ると、弥生時代前期に遡る中郷遺跡、長砂古遺跡が知られ、付近には銅劍、銅矛の出土を伝える遺跡も所在しており、弥生時代におけるこの地域の重要性が指摘できる。しかし、古墳時代前期には顕著な古墳は知られておらず、再びこの地がクローズアップされるのは古墳時代中期以降である。中期古墳としては赤岡山古墳が知られ、後述の母神山古墳群に先行する有力墳として注目される。古墳時代後期になると50余基に及ぶ古墳が集中する母神山古墳群をとりまくように、数基から20数基が群集する古墳群が低丘陵上に散在し、付近は一大古墳地帯と化す。従って、雲岡古墳は大局的にみれば、これら三豊平野の中核部ともいべき古墳地帯の縁辺部に位置するともいえるであろう。



- | | | |
|---------------|------------------|------------------|
| 1. 雲岡古墳 | 8. 船岡塚 | 15. 藤目山古墳群(9基) |
| 2. 院内貝塚(縄文前期) | 9. 豆塚古墳群 | 16. 母神山古墳群(50数基) |
| 3. 大坪窯跡(平安時代) | 10. 平塚(巨石塚) | 17. 百々古墳 |
| 4. 獅子ヶ鼻城 | 11. 角塚(巨石塚) | 18. 中姫遺跡(弥生時代) |
| 5. 净福寺跡 | 12. 梶貨塚(巨石塚) | 19. 柿田駅跡 |
| 6. 台山古墳(中期古墳) | 13. 赤岡山古墳群(20数基) | 20. 久染遺跡(弥生時代) |
| 7. 大木塚(鎌倉時代) | 14. 緑塚古墳群(10数基) | 21. 長砂古遺跡(弥生・古墳) |

第2図 周辺の遺跡地図

第4章 調査の結果

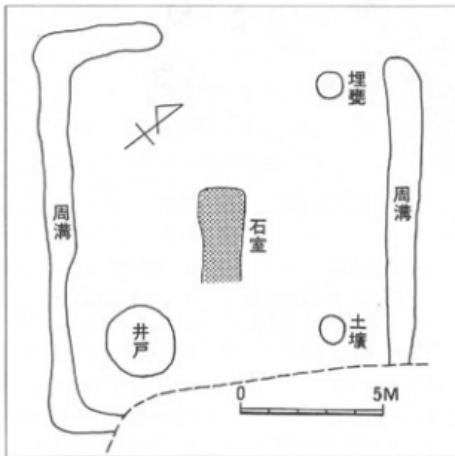
1. 墳丘と周溝

そもそも調査の契機となつたのが、圃場整備に伴つて小盛土を掘削中に石組みが露呈したためであり、その際、墳丘の大部分が削平され原形はほとんど留めていなかつた。しかしながら、工事担当者や地権者の話によると、もとは直径10m、高さ1m余りの円形を呈するマウンドを有していたようである。石室北東部に若干残存していたマウンドからもうなづける見解であり、当初は円墳の可能性が強いものと思われた。ところが石室より5~6m外縁部に周溝と思われるU字溝を検出し、それが石室主軸に平行あるいは直行する方形であることから方墳であることが確認された。

古墳の規模については周溝間の距離によって計測可能であるが、その際、周溝の上縁部が後世の削平を受けていないかどうか、すなわち検出した周溝の肩が古墳築造時の周溝の肩であり、また墳丘の基底部であるのかがまず問題となる。これについては、石室の基底部として平坦に整形された地山面のレベルと周溝の肩のレベルとを比高すると、北側東の周溝ではほぼ一致しているが南西側については10~20cmほど周溝の肩の方が低くなつてゐる。従つて、墳丘南西側の周溝については削平を受けているとも考えられるが、両側の周溝を比較すると幅、深さ等にそれほどの差はみられず、周溝はほぼ原形を留めているものと思われる。とすれば、周溝間の距離によって計測される墳丘の規模は、石室左右間で11.2m、石室前後間で12.7mとなり、石室主軸方向にやや細長い形態であったことになる。

墳丘の築成についてはマウンドかほとんど残存していないため断言はできないが、石室床面が地山整形後の盛土によって構築されているため、墳丘もすべて盛土によって形成されたものと思われる。段築については不明という他ない。

周溝については、南東側が調査区域外となるため全容は明らかでないが、北西側は北部の約8mを欠くため全周はしていない。この部分については、周溝両先端部が垂直に近い立ち上がりを見せるた



第3図 遺構配置図

め、古墳築造時に意識的に構築されずに何らかの機能を付与していたものと思われる。

「橋」あるいは「道」としての機能も考えられるが、横穴式石室の開口方向とは反対の位置になり、幅も広いため--考が必要なあり方である。

周溝の規模は幅約1m、深さ20cm~30cmと一様であり、三層に分けられる埋土の堆積状況にも変化はみられないため、一律に埋没した過程が伺える。

2. 石室

(1) 形態

奥壁の2石と左側壁の3石のみが原形をとどめていたのみで、石組みからは石室形態、袖の有無、石積み法、規模等を明らかにすることをできなかった。石室右側にも側壁石が一石残存しているが、床面に接しておらず、黒灰色礫まじり土にのっかかるような検出状態であったため、後世動かされていることは明らかである。また、床面は拳大の礫を敷いて床面としているが、盃掘・攪乱によって若干動きが認められる部分も見受けられる。

以上のことより、石組み検出状況から石室の形態を究明するのははなはだ困難であるが、礫床の範囲と石室外に構築されている排水溝よりある程度の解明は可能であった。まず、石室右側壁については先述の側壁石と奥壁との間約1.3mにわたって、礫床がはり出すように敷かれている。一部欠けている部分については、外側に倒壊している側壁石の囲りに散乱する礫がもとは敷かれていたのであろう。従って、礫床は奥壁から1.3mの地点までは幅1.4mの範囲を保つように直線的に敷かれ、続く0.3mの間で次第に狭まり再び直線的に敷かれていることが伺える。礫床は後世動かされている可能性はあるが、このように右側壁が玄門付近で内側にゆるやかに湾曲して切れ込む形態は三豊平野の小型横穴式石室で通常見られるものであり、礫敷範囲についてはそれ程の変動は無かつたものと考えたい。

左側壁については、基底石が3石やや胴張り気味に直列配置されている。その3石に続く地点に地山を約20cm掘り込んだ精円形の掘り方が検出され、当初石室外に構築された排水溝につながる溝ではないかと思われたが、排水溝に比べ約7cm深く掘り込まれており排水の用はなし得ないと考えられるため、基底石を安置するための掘り方と考えの方が妥当であろう。残存する側壁3石が地山直上に置かれているのに対し、この部分の基底石が地山を掘り込んで立てられているのは、玄門立柱を意識しての所作と考えられるが側壁3石とは一直線上につながる位置であり袖の形成はなかったものと思われる。従って、左側壁については、玄室から渓道にかけて板石の直列配置が復原される。

以上の見方を総合すれば直線的な左側壁と玄門付近でゆるやかに内湾する右側壁から

なる石室形態が考えられ、平面形に関しては三豊平野の小型横穴式石室に通有のものである。しかし三豊平野で一般的な小型横穴式石室は、小型柱状あるいは板状の基底石を直列に配し、また細長い玄室平面形を有するのに対し、玄室の短小化と基底石の巨大化が著しく、伝統的な形態を残しながら後出的な特徴も兼ね備えている。

羨道部については礫床を残すのみであり、詳細は不明である。また、石室南側で大型の平石2石と小砾群が検出されているが、平石については側壁を形成していた石材であったと思われる。また、小砾群については羨道部に敷かれていたものであろうが、玄室部のものに比べて小型なものである。

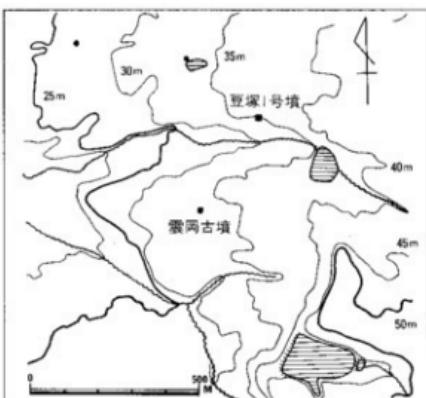
(o) 規 模

玄室については奥駆から左側壁の玄門立柱の位置まで約1.5mの長さと考えられる。羨道部については残存する礫床の範囲は約1mをはかるが、先端部が振削されていると思われ明らかではない。また、玄室幅は左側壁石から右側壁付近の礫床範囲まで約1.4mをはかる。この数値も正確とは言えないが、それほど大きい変動はないと思われ、玄室は1.5m×1.4mの正方形に近い形態であったと思われる。

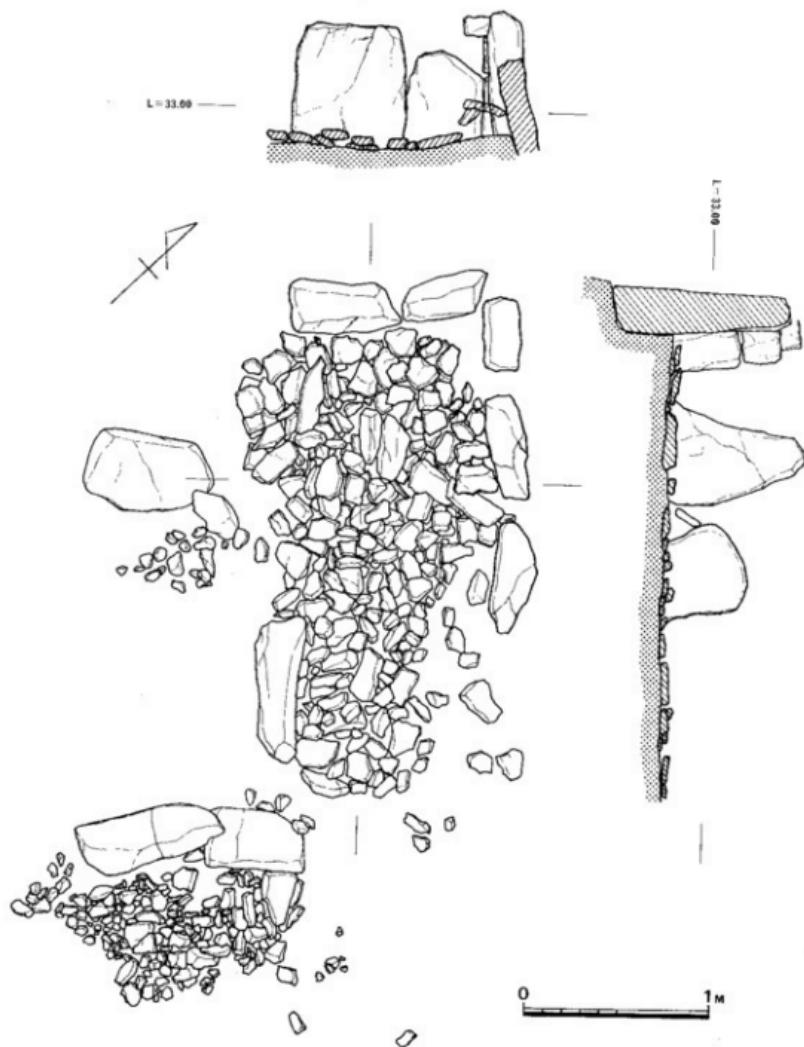
石室全体像はつかめないが、墳丘の規模に比較して石室はいかにも小型である。先の玄室規模で成人遺体を安置することができたのかについても疑問が残る。

(i) 方 位

石室の主軸はS47°Eをとり、ほぼ南東方向に開口する。この方位は通有のものと言えるが、古墳が南東から北西に延びる低丘陵に立地しているため、開口方位は傾斜に逆行している。横穴式石室はほぼ南に開口するのを通常とし、付近の古墳でみると巨石墳といわれる錐子塚古墳、角塚古墳が南に開口するほか、母神山古墳群中の黒島林支群が南から西の間に開口方位をもつ。しかし、同古墳群中の千尋支群が北東方向と全く逆の間に方位をもつほか、県内各地には地形その地に制約された結果、北方向に開口するものも散見される。雲岡古墳の場合は、傾斜に逆行する形であるが、なだらかな傾斜であるため通有の方法を踏襲したものと思われる。



第4図 周辺の地形図



第5図 石室実測図

(二) 構築

残存する奥壁石、側壁石は基底石の6石と左側壁の最奥部に積まれた2石のみである。そのうち奥壁巨石と左側壁最奥部に3段積まれた石材は直方体状を呈しており、面を合わせるために加工を施した結果であろう。その他の奥壁、側壁石についても平坦面をもつ自然石はそのまま使用しており、そうでないものには内側に加工を施して平坦面を形成しており統一性はない。

玄室各部の基底石は、石室床面周囲の床面より20cmほど低い位置に構築された幅約20cmのテラス上に立てられている。このテラスは地山に石を立てたあと石室床面に礎床の基盤となる上を20cmの厚さに盛り同め、外側に排水溝が構築されていたその結果として形成されたもので、立石の基盤として意識的に構築されたものではない。

奥壁の基底石で残存するのは2石であるが、玄室の幅からみて奥壁の南西端にもう一石置かれていたと思われ、奥壁は3枚の石が基底部を成していたらしい。その抜き取られたと思われる石はそのスペースよりそれほど大型であつたとは思えず、奥壁の3基底石は中央の大型石の左右に小型石を配していたものと思われる。左側壁の3基底石は形状、大きさ等統一性がなく、各々の間には20cmほどの間隙がある。また、中央の石は先端が尖っており、上部に大型の石を積みあげるには無理がある。従って、3枚の基底石間及びその上部には小型の石を配していたものと思われるが、後述する巨大な天井石を架構するには入念な裏込めによる固定化が必要とされよう。

石室床面は拳大～小児頭大の河原石を1～3重に敷きつめている。規則性はみられず、棺台と思われる石も検出されなかったが、礎床上面のレベルはほぼ一定しており安定感は認められる。この礎敷は先述のように玄室のみならず羨道にも敷かれており、三豈平野に所在する後期古墳の横穴式石室が玄室のみに礎が敷かれる例が多いのに対し、特徴的な点である。この変化については玄室の矮小化と相まって羨道部の埋葬空間化を表出しているものと考えられる。^{注(7)}また、礎敷は地山面直上に並べるのではなく、20～30cm盛土を施してその基盤としている。盛土は暗黄色系粘質土で、よく敲き締められている。さらにこの盛土は奥壁、側壁の基底石まですき間なく充填され、また石間の間際にまで及んでいるため、石組み後かあるいは並行して実施されたものと思われる。

石室上半部の構造については何もわからない。ただ、蓋石と思われる大型の平石が石室南賀側にずり落ちたように検出されており、大型の石材が蓋石として使用されていたようである。玄室幅を覆うに十分な幅を有しており、石室壁体に持ち送りはなかったものと思われる。

墓壙についても墳丘が失われていたため不明であるが、後述するようになかった可能性が強い。

(4) 排水溝

玄室の奥壁石・側壁石の周間に上面の幅20~30cm、深さ6~13cmの断面台形を呈する溝が掘られており、位置・形態より排水溝と考えられる。右側壁の外側部分については擾乱のため構築されていたか不明であるが、左側壁石に沿うように掘られた溝については遺存状態は良好で全容を知り得た。

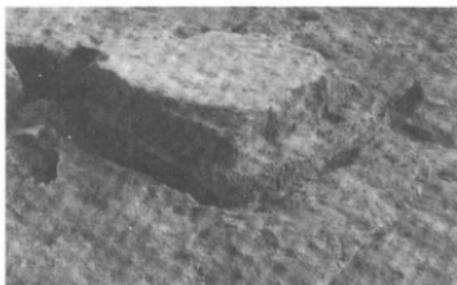
溝は玄門立柱の掘り方を基点とし、側壁石・奥壁石外を巡るように走ったあと奥壁中央付近から開口方向とは反対側に向かって延びている。底のレベルがほぼ水平であり、石室の開口方向が地形傾斜に逆行するため、自然排水溝は基点付近で約13cmと最も深く、先端付近では約6cmと次第に浅くなる。外部へ延びる部分については0.5mの長さにわたって検出しているが、その先は削平されているため総延長は不明である。

玄室右側については、側壁と奥壁が接する付近からは検出されており、左側からのものと合流する形となる。奥壁から側壁に向かって直角に屈曲する傾向も伺えるため、旧状は玄室左側と同様であったと思われる。従って、排水溝全体としては玄室三壁をコの字型に取り囲んで集水し、奥壁外へ排水するものであつただろう。

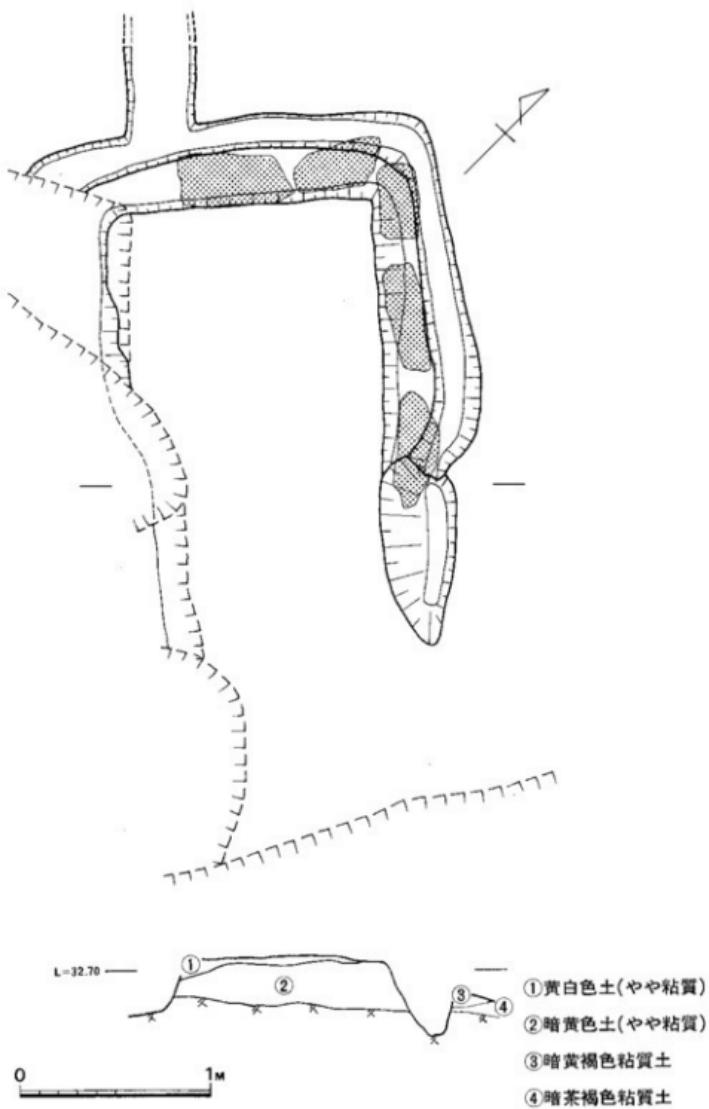
しかしながら、溝内には礫、遺物等がみられず黄褐色粘質土で埋まっており、上部を覆う蓋石等も設置されていなかった。また、この上部は奥壁石、側壁石を立てる際それらを安定させるために盛土を充実させていたと考えられるから、古墳築造後排水施設としての機能を果たしていたのかという疑問も残る。この点については第5章「まとめ」の項で考察を加えるが横穴式石室の排水施設は通常、石室内部に溝を掘り、石蓋・礫敷を施す等の構築法が採用されるのに対し、こうした排水溝のあり方は初見のものと思われ、新たな排水形態として注目される。



第6図 排水溝検出状況



第7図 排水溝完掘状況



第8図 石室完掘状況

(3) 遺物

(4) 遺物出土状況

雲岡古墳から出土した遺物は各種の須恵器のみであり、数量的にも少いものである。それらは出土位置から石室礫床上、玄室礫床下、周溝内と3大別されるが、さらに細分される可能性もある。

石室の礫床上から出土したものは、長頸壺1点のみであるが、漢道外の地点に耕作土に混じってほぼ完形の高台付杯身が1点出土しており、構作中の二次的移動を受けているのは明らかであるからもとは漢道内か漢門付近に置かれていたものであろう。長頸壺は玄門部やや奥壁寄りから出土しているが、頭部は欠損しており胸部下半を伏せたような検出状況である。胸部上半片が礫床直上ではなく埋土中から出土していることから、長頸壺も原位置は留めていないようである。

玄室北隅部の礫床を取り除いた際、下の盛土面上から須恵器4点を集中して検出している。須恵器の器種は高台付杯身1点と宝珠つまみ付杯蓋3点であり、杯身の内側を下に向けて置いている点が特徴的である。杯蓋も2点は伏せた状態で、1点は蓋の内側を上に向けて置いている。これらは礫床下ということもあり、礫にそれほどの攪乱がみられないことから、副葬時の位置を留めているものと思われる。その意義については後述する。

周溝内から出土した遺物は須恵器類であるが、出土位置は2ヶ所に大別される。周溝北東長辺北隅部の一群と南西長辺南隅部の一群であり、対称的な位置関係にある。前者は須恵器の小片ばかりで器種不明であり、図化可能なものも見当らない。後者については、須恵器大甕と須恵器杯が破碎された状態で集中して検出されている。墳丘上に並べられたものの流れ込みと考えられなくもないが、3層に分層される周溝内埋土の最下層と第2層中から一括して検出されていることから、当初から周溝内に破碎して置かれたものと思われる。埋葬が終った後、墳丘周辺で行われるとされる儀礼の痕跡としてしばしば大甕と杯のセット関係が取り上げられるが⁽⁸⁾、雲岡古墳の場合もその例に漏れるものではない。



第9回 磕床下遺物出土状況



第10回 磕床上遺物出土状況



遺物出土状況



第11図 石室内遺物出土状況

(iv) 各遺物の特徴

1. 杯蓋

口径19.3cm、器高3.7cmをはかる。天井部はやや平坦で、なだらかに内湾しながらくる。端部近くで段をなし、やや下方に屈曲して端部に至る。瑞部は丸い。ツマミは扁平な擬宝珠様で、ハリツケによる。径3.2cm、高1.0cmをはかる。天井部^等は回転ヘラ削り後回転ナデ調整、その他は回転ナデ調整。内面は不整方向ナデ調整。白色砂粒を小量含むが胎土は密。焼成はやや不良で外面灰白色、内面茶白色を呈す。

2. 杯蓋

口径18.1cm、器高3.9cmをはかる。天井部はなだらかに外下方にくだり、端部近くで段をなしやや下方に屈曲して端部に至る。端部は丸い。ツマミは扁平な擬宝珠様で、ハリツケによる。径2.9cm、高1.1cmをはかる。天井部^等は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整。ロクロ回転は左方向。やや大きめの白色砂粒を小量含む。焼成はやや不良で、内外面ともに灰白色を呈す。

3. 杯身

口径16.0cm、器高3.6cm、高台径13.2cm、高台高0.9cmである。口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸い。体部はゆるやかに外傾して立ち上る。底部は平らである。高台は垂直にくだったあと内斜する平底を有し外側で接地する。高台はハリツケによる。外面底部、体部、内面体部が回転ナデ調整で、内面中央部は不整方向ナデ調整。白色砂粒を少量含み、焼成は堅緻で青灰色を呈する。なお、底部に「富」のヘラ書き文字が記されている。

4. 杯蓋

天井部はやや平坦で、なだらかに外下方にくだる。口径、器高、端部の形状は不明。ツマミは扁平な擬宝珠様で、ハリツケによる。径2.5cm、高0.8cmをはかる。天井付近は回転ヘラケズリ。ロクロ方向は左方向。焼成不良で黄灰色を呈す。

5. 長頸壺

胴径15.4cm、高台径8.8cm、高台高1.1cmである。体部は外反したのちやや角度をかえて肩部に続く。底部は平らで、端部に断面長方形の高台をつける。高台はハリツケで、底部は平らである。内外面ともに回転ナデを施している。1mm～3mm白色砂粒を含み、焼成は良好で、内外面ともに青灰色を呈する。

6. 杯身

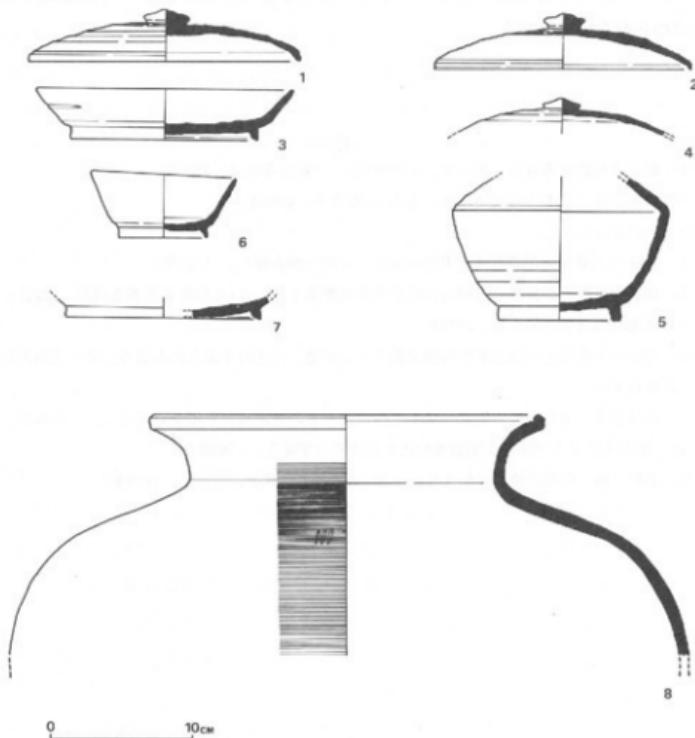
口径10.1cm、器高4.7cm、高台径6.3cm、高台高0.7cmである。口縁部は外湾ぎみに外上方にのび、端部は丸い。底部は平底でハリツケによる高台は断面三角形で垂直に下る。内外面ともに回転ナデ調整を施す。少量の白色砂粒を含むが胎土は密で、焼成は良好である。内面、外面、外側ともに自然釉が付着し、緑褐色を呈する。

7. 杯身

高台径13.8cm、高台高0.8cmである。底部は丸底状を呈しつつとんど接地氣味である。口縁部は不明。高台は垂直にくだり、外側で接地する。高台はハリツケによる。内外面とも磨耗が激しく調整不明。白色砂粒を少量含み、焼成不良で黄灰色を呈す。

8. 裝

口径27cm、残存高17cmをはかる。口縁部はくの字型に外反し、端部を内側に屈曲させる。体部はなだらかに下り、やや扁平な球体をなす。外面は平行タタキ目のあとカキ目(19~20本/3cm)。内面は同心円叩きのあと丁寧にスリケシ調整を施す。白色砂粒を少量含み、焼成はやや不良で外面は灰白色、内面は黄灰色を呈す。



第12図 遺物実測図

4. 小 括

- ここで、概観してきた雲岡古墳の特徴を列挙しておく。
- (1) 墓丘は1辺11.2m×12.7mの方墳である。
 - (2) 幅1m、深さ20~30cmの周溝が構築されているが、北西短辺に約8mにわたって途切れる部分がある。
 - (3) 無袖式の横穴式石室を主体部とするが、形態的には伝統的な面を残しながら、規模の縮小化と基底石の巨大化が著しい。
 - (4) 石室の開口方位はほぼ南東方向で、地形に対しては逆行するものである。
 - (5) 石室床面には20~30cmの盛土後礫敷きを施している。礫敷範囲は浜道部に及ぶ。
 - (6) 玄室周囲にコの字型の排水溝が掘られ、外に向かって延びている。
 - (7) 遺物は礫敷下、礫敷上、周溝の3ヶ所から出土しているが、すべて須恵器で型式差は認められない。

(注)

- (1) 観音寺市教育委員会「第4章、古墳時代」(『観音寺市誌』1985年)
- (2) 廣瀬常雄『日本の古代遺跡8、香川』(保育者、1983年)
- (3) 前掲註(1)と同じ。
- (4) 黒島林古墳群発掘調査団『黒島林第5・6号墳調査報告』(1977年)
- (5) 観音寺市教育委員会『母神山古墳群千尋支群第1・4・5・6号墳発掘調査概要』(観音寺市文化財調査報告第3号、1973年)
- (6) 例えば丸亀市背の山古墳群西麓支群1・2号墳、綾南町本法寺西古墳等が北~北西方向に開口する。
- (7) 森岡秀人「追葬と棺体配置—後半期横穴式石室の空間利用原理をめぐる二、三の考察」(『関西大学考古学研究室開設参賀周年記念考古学論叢』1983年)
- (8) 亀田 博「後期古墳に埋納された土器」(『考古学研究』23-4、1974年)

第5章 まとめ

さわめて短期間の調査であったが、雲岡古墳からは注目すべき多くの成果が得られた。ここでは、問題となる点について若干の考察を加えながらまとめとしたい。

(1) 排水溝について

横穴式石室の排水については、石室床面下に溝等を構築し、玄室あるいは羨道内に流入、湧出する水を羨道外へ排出する方法が一般的である。このような排水溝の構築法についても数種類のパターン化が可能であり、時期的な型式変化と把えたり地形との関連^{注(1)}からそれらの性格を把握する作業もなされている。県内の横穴式石室においても、様々な形態の排水溝が構築されているが、反面、普遍的なものとはいい難く型式分類はそれほど重要な意味を持つないと思われる。そこで、ここでは特徴的な排水溝を取り上げその性格等について言及した後、雲岡古墳の排水溝が持つ特質について若干の考察を加えてみたい。その際、地域的な片寄りを避けるため便宜的に県内を大川地区、高松地区、中讃地区、三豊地区に分け、各々から例示的に一基づつ取り上げることにしたい。

① 中尾古墳の場合（大川地区）

中尾古墳^{注(3)}は香川県の東部、大川郡寒川町の北に延びる低丘陵の先端に位置する。6世紀末ごろに築造されたもので、石室は全長10m以上あり石材の大きさから巨石墳の範疇で捉えられるものである。

排水溝は玄室中央付近から始まり、玄門付近でやや屈折し羨道部外にまで続く。断面U字形を呈し、玄室内の部分では礫敷きと蓋と思われる平石敷きがみられる。石室が地山を約20~30cm掘り込んだ墓壙内に構築されているが、その墓壙底をセンター・ラインに向かって傾斜させ、その傾斜合流地点を深掘りして排水溝としているため床面全体が排水施設の感がある。従って、この排水溝は墓壙構築時に続けて掘られた可能性が強く石室構築中に排水機能を果たしていたと思われるほか、溝周囲の礫敷きに規則性がなくまた「く」の字に折れ曲がる平面形をしていることから、石室内分割や石室構築のためのわりつけといった機能を有するでもなく、石室構築後も純粋な排水施設としての機能を果たしていたものと思われる。

② 南山浦11号墳（高松地区）

南山浦古墳群^{注(4)}は高松平野中央に位置する淨願寺山東麓の緩傾斜面に分布する10数基からなる古墳群である。昭和59年度に5基が調査されたが、排水溝は11号墳のみで検出

されている。玄室奥壁を起点とし羨道先端に至る全長約7mの素掘りのU字溝である。

報告書によれば、「排水溝内に」「床面直下の土師器片が余り落ち込んでいないので、古墳築造後きわめて早い時期にその機能を終了していた」ことが考えられ、この排水溝の機能を考える上で示唆的な点である。傾斜地に立地する石室であり、周溝・礎床等が構築されていることから、石室構築後の排水の必要性はあまり考慮されず、同古墳群中のその他の石室が排水溝を有していないことから考えても同石室を構築中に排水の用を果たした溝ではないかとも考えられる。

③ 本法寺西古墳（中讃地区）

本法寺西古墳は香川県のほぼ中央、綾歌郡綾南町に所在し、地形的には尾根先端付近の高所に立地する。主体部はいわゆるT字型の両袖式横穴式石室であり、幅約20mのU字溝が玄室四壁の石積み下に掘られ、玄門部で集水し羨道外へ排水される。この形態は県下では初見のものでその位置付けが問題となるが、機能的には玄室内及び羨道外の部分においては板石で覆い、また羨道部においては平石を並べて蓋をするという暗渠方式を採っており、石室構築後の排水機能の維持も万全である。^{注[5]}

④ 長砂古古墳（三豊地区）

三豊平野のほぼ中央、観音寺市に所在する長砂古古墳は近接する母神山古墳群に共通する内容をもった横穴式石室を主体部とする。排水溝は奥壁付近より石室中央を横切り羨道外へ延びるもので、全面にわたって平石の蓋が施されている。特徴的なのは、石室床面に三豊平野の小型横穴式石室に通有の二重構造の礎床が構築されているが、下層においては排水溝の蓋石を挟んで礎の敷き方が異なっている点である。すなわち、玄室より羨道に向かって左側は石室主軸に沿うようにはば規則的に並べられているのに対し、右側には規則性がみられない。同様な例は、母神山古墳中の黒島林13号墳でもみられるが、埋葬に関する何らかの意図を反映しているものと思われる。^{注[6]}

森岡秀人氏によれば、横穴式石室においては「築造当初から予め初葬棺と追葬第1棺との配置関係が考慮に入れられ」^{注[7]} 石室最奥部における二棺並葬が最も一般的な納棺法である^{注[8]} と考えられている。長砂古古墳の場合、さらに上層に小さめの礎を敷きつめた二重礎床であり、こうした二重構造の礎床について下層を埋葬面とみる見方が否定的^{注[9]} であるため、ダイレクトに森岡氏の説に結びつけるのは危険を伴うであろう。しかしながら、上層の礎床上に配置された棺台と思われる塊石の矩形配列が下層の規則性のある礎群の範囲とはほん重なり合うため、石室築造に際し羨道側からみた右棺先葬を意識して入念な礎敷きを旋したと考えるのは可能であろう。

こう考えてくると、本来的な機能は排水であり無意識的な所作とも思われるが、結果的には排水溝が埋葬空間を分割する役割を果たしていることになる。あくまで副次的な産物であろうが、排水溝及びその蓋石列が棺体配置の一指標となった可能性を指摘しておきたい。

以上、各地域における特徴的な排水溝のあり方を検討し、横穴式石室構築後の石室内への出水を外部へ導く本来的な機能のみを有するものがある反面、機能期間の中心を石室構築時に持つ例や石室内空間分割という副次的産物を持つ例がある可能性を考えてみた。いずれにせよ、本来の機能は排水でありその他の機能を過大評価することはできない。従って、「石室床面の排水が可能であれば良く、排水溝自体は石室構築前に設定する^{注10}が、横穴式石室構築上の本質的なものではない」という指摘は当を得たものであろう。

これに対し、雲岡古墳で検出された排水溝は、玄室外側を「コ」の字型に巡り奥壁中央付近から石室開口方向とは反対向きに延びる形態であって、様相は全く異なる。石室内排水溝と同様に排水機能を果たしていたであろうことは、外に向かって延びる溝が掘られていることからも明らかであり、こうした形態を生み出した要因を、石室の開口方向が傾斜に逆行するため排水の用を果たすにはそれと逆方向に溝を掘る必要がある点に求めることも可能であろう。

しかしながら、この溝には先述のように蓋石・礫敷といった施設もなく粘質上で埋まっており、石室構築後は上部に盛土を充実させていた位置でもあるため、遺体埋葬後も排水の用を果たしていたと考えるのは困難である。考えられるのは、石室構築前に掘られて排水その他の機能を果たし、奥壁・側壁の基底石を据え付ける段階で埋め戻されたという見方である。構築から廃絶まで極めて短かい機能期間であったと思われるのである。

こうみると、次の二つの可能性も指摘できる。

⑦ 排水溝は奥壁中央付近から外に向かって延びており、石室はともかくこの排水溝部分についても埴丘築成後その盛土を掘り込んで構築したとは考え難い。従って、地山整形直後に溝は掘られたとみるべきで、その後石室石積みと埴丘盛土が並行して実施されたものと考えられるから、石室構築に際して通常みられる墓壙掘り方はなかった可能性が強い。

⑧ 石室構築以前のそれも短期間で消滅する溝であれば、排水以外にも機能があったことも考えられる。実測図を見ると、玄室の奥壁及び側壁の基底石はいずれもこの溝に接するような検出状態である。この状態はあたかも溝に沿って立てられているかのようであり、逆言すれば、溝が後に構築される石室の規模さらには位置をも規定しているように見受けられる。通常、地山を掘り込んだ墓壙が石室の位置、規模、方位等を決定するが、①で想定したように掘りの方はなかったと考えられるから、雲岡古墳においては溝によってそれらを決定したものと思われる。従って、この溝は単に排水のための施設と考えるよりは、古墳築造企画の中でこそ位置づけられる可能性があるのではないだろうか。

以上、県内の横穴式石室にみられる石室内排水溝との対比を通して雲岡古墳の排水溝の持つ特異性について考えてみた。このような排水溝形態が類例のないものであり、即断は危険であろう。しかしながら、雲岡古墳と同様に墳丘が地山平坦面整形の後盛土のみによって築成されている古墳では、同様の溝が検出される可能性があることを指摘しておきたい。

(2) 石室構築法について

横穴式石室の特徴は第4章において様々な観点から概観してきたが、その構築に関する特徴的な点を列挙して石室構築過程を復原してみたい。

〈特徴〉

- (a) 古墳築造前に地山面を水平に整地したものと思われる。
- (b) 石室構築前に玄室外に排水溝が掘られる。
- (c) 溝に沿って基底石が立てられている。
- (d) 石室床面に盛土を敲き締めている。
- (e) d の盛上基盤上に円礫を敷いている。

〈構築過程〉

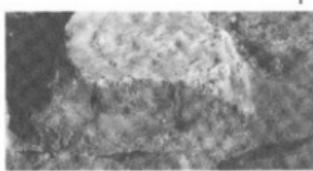
石室上半部の構造が不明であるため、整地から石組みまでの工程を復原する。



第1表 石室構築過程



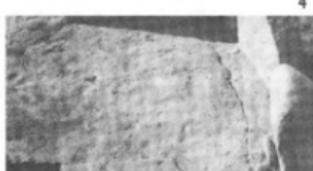
1



2



3



4



5

3. 雲岡古墳の築造年代とその占める位置

雲岡古墳出土の須恵器は、出土状態から礎床下、礎床上周溝内という3種に大別されるが、いずれも陶邑編年のIV型式の1段階のものと考えられる。このうち、礎床下より出土した一群の須恵器が古墳築造時期解明の鍵を握っていると思われる所以、若干の考察を加えてみたい。

先述のように、石室の床面構築は特異なもので、20~30cmの厚さに盛土を敲き締めた上に礎敷きを施している。奥壁・側壁の基底石を据えつけるため溝状の掘り方を構築し、^{注10}その結果、床面との段差が現れるのは母神山古墳群でも通有のものであるが、地山面直上に並べた奥壁・側壁石の内側に盛土を施して段差をなしているのは珍しい。類例を求めるにすれば、石と土との違いはあるが、三豊平野の横穴式石室にみられる二重構造の礎床の下層敷石に相当するのではないだろうか。

そこで、母神山古墳群中の上母神4号墳と黒島林6号墳を例にとり比較してみようと思う。上母神4号墳では玄室の奥壁寄り^{注11}の範囲は10cm程度の大きさの石を、その他の部分では20cm程度のものをと石材の大きさを変えて整然と敷きつめた下層敷石の上に、一旦茶褐色粘土を敷き、その上に小円礎を乱雜に敷きつめている。報告書では下層敷石上に遺物がみられないことと茶褐色粘土の存在をもとに、下層床面は未使用面であって礎の大きさを変えて敷石を二分しているのは複室構造の意識があったのではないかと考えられている。その是否はともかく、下層敷石とその上の粘土層は墓壙底より10~15cmの厚さに敷き、埋葬面である上層敷石の基盤となってくる点は先述のように土と石との違いはあるが構造的には雲岡古墳^{注12}と共通するものと考えられる。黒島林6号墳の石室床面は三層に区分されている。上層に砂利土、中間に大きめの砂利層、下層は礎敷と区分されるが、下・中層が墓壙底面より12~15cmの厚さを有し、上層の基盤となっている点は本墳及び上母神4号墳と同様である。上母神4号墳と異なる点は下層面上でも遺物の出土^{注13}をみている点であるが、埋葬面としての使用については否定的な見解が出されている。

雲岡古墳の盛土面上には玄室北隅部で須恵器杯身、杯蓋が4個体分が集中して検出されており、この点は二重礎床の下層面のあり方と異なる点である。しかしながら、盛土面上には埋葬の痕跡が認められず埋葬面としての使用は考えられないことから、構造的にも機能的にも下層礎床に相当するものであると考える。

この礎床下出土の遺物については、本来礎床上にあったものが後世の攢乱によって盛土面に沈降したとは考えられず、旧位置を保っているものと推察される。後期古墳出土土器については、亀田博氏によって出土位置から(1)棺内の土器、(2)棺側・棺上・または横穴式石室内の土器、(3)墳頂部・前方後円墳のくびれ部・または横穴式石室前庭部の土

^{注19} 器に区分されているが、雲岡古墳の場合は疎床下という但し書が付くものの、大別すれば(2)に相当するものと思われる。従って、その意義については、「モガリ」の場で供した、あるいは死者が生前使用した食膳を埋葬に先立って石室内に持ち込んだものと考えられるのではないか。とすれば、これらの須恵器は床面盛土→土器副葬→疎數→遺体埋葬といった一連の埋葬過程の中で位置づけられるであろうし、この遺物の年代がほぼ古墳築造年代を表しているものと考えられる。さらに、この石室内盛土後の遺物副葬に際しても何らかの儀礼が行われたことが考えられ、先にみたようにこの盛土と二重構造の下層疎床とを同一視することが可能であれば、二重疎床の意義を考える上でも新たな視点を提供することになるであろう。

以上のように疎床下出土須恵器等の年代がそのまま古墳の築造年代を示すと考えれば雲岡古墳には7世紀末葉という築造年代が与えられることになる。ほぼ同時期の須恵器^{注20}を出土している長尾町前山1号墳が石室形態から7世紀に下る築造年代を与え難いのに対し、雲岡古墳の横穴式石室は遺存状態は悪いものの無袖式であると考えられること、石室規模の縮小化が著しく渋道部が埋葬空間化していること、基底石には同古墳の使用石材としては大型の平石を立てて使用していること等終末期古墳の特質と思われる要素も備えており、遺物と石室形態との間に矛盾はない。三豊平野においては、母神山古墳群を代表として大野原町角塚古墳等を除きほぼ7世紀前半代には新たな古墳の造営を行わなくなり、7世紀末葉には追葬さえも稀であることを考えれば、雲岡古墳の特異性は大きくクローズアップされるであろう。

こうみると、改めて雲岡古墳の位置づけが問題となってくる。県内では7世紀末葉という築造年代をもつことが確実な初めての調査例であり、また付近には周知の遺跡が稀薄な現状にあっては明確な位置づけは至難のわざという他ない。従って、ここでは今後の見通しを含めて特徴的な点を羅列するに止めておきたい。

付近で雲岡古墳に先行する最も新しい例は大野原町角塚古墳であろう。一辺約43cmの方墳と思われ、両袖式の横穴式石室は全長10m全りあって隣接する楕円墳→平塚に後続すると思われる巨石墳である。この角塚古墳の横穴式石室に類似する形態の石室が瀬戸内沿岸の各地にみられ、その内愛媛県川之江市向山1号墳では7世紀中葉^{注19}頃の須恵器を検出しておらず、角塚古墳も同時期の築造年代が与えられると考えられている。その意義については山崎信二氏によって石室形態及び文献と地名との検証を通じて各地の結合・^{注21}同族関係の中に位置づけられると考えられているが、その存立基盤となったのは広大な三豊平野の生产力であったと思われる。

これに対し、雲岡古墳は三豊平野の南端に位置するとはいえ、付近に顕著な集落遺跡は確認されておらず、また群集形態をとらないことから三豊「平野の無古墳地域の人々

^{注28}の奥津城」と考えることにも無理がある。従って、時期的には角塚古墳に後続し石室形態にも三豊平野の伝統的な手法の痕跡が認められるものの、三豊平野の各地に群集し総数が数百基にのぼると言われる後期古墳に継続する性格を持つと考えるのは困難であろう。当該地からやや西に降った地域に「船岡塚」「範塚」という地名が残っており、往時には町域に湾入していたと思われる海と関連づけられるかもしれないが、それとても積極的根拠があるわけではない。ただ、道あるいは橋といった機能を考えられる周溝の切れ目が海を見降す方向であり、後・終末期の小古墳に構築された周溝についての研究が進めば解明の糸口となるかもしれない。

三豊平野の後・終末期古墳のあり方をみると、7世紀前半には新たな古墳の造営をほぼ行わなくなり、角塚古墳に並行する時期の古墳は山本町山辺古墳が可能性のあるぐらいの現状にあっては、その半世紀近くに及ぶと思われる間隙をどう把えるかという疑問もある。

^{母神山古墳群の黒島林5、6号墳は6世紀末頃に築造されたと考えられているが、7世紀末頃まで追葬が行われている。付近には、7世紀末頃まで追葬が行われたと思われる古墳は黒島林8号墳^{注29}が他に知られるのみであるが、これをもって黒島林支群の特色とは考えられず、三豊平野においては7世紀代を通じて追葬が一般的であったと考える方が妥当であろう。この点は、大化薄葬令が「群集墳がすでに築造されなくなっている実態をふまめて規定したもので」あるという見解の状況証拠ともなりうるあり方である。}

雲岡古墳の築造時期はまさにそれら群集墳の追葬期間の終末期に相当する。造墓活動は停止されながらも、代々埋葬施設として使用されていた横穴式石室を再利用することが可能であった^{三豊平野中権部の小規模共同体首長層に対し、雲岡古墳の被葬者は既存のものを有しておらず時流に反するものでありながらも新たな造墓活動を行ったという見方ができるのではないだろうか。}新たな生業の展開があったのかどうかは伺い知れないが、三豊平野最南端の地において新たに台頭してきた家族の存在を物語っているとともに追葬と造墓を支える横穴式石室使用原理の積極性が7世紀末葉まで継続していたものと考えられる。また、雲岡古墳は墳丘規模に対して石室はいかにも小さく、遺物からみても追葬の痕跡は認められない。築造当初から追葬を意図しない造墓であったと考えられよう。水野正好氏によれば、「600年から610年ごろ複次葬から単次葬へ、つまり家族墓から個人墓へといふ墓制の転換」^{注30}があったと考えられており、雲岡古墳についても時期的には後出であるが、家族墓ではなく特定の個人墓であったという見方は可能であろう。

以上思いつくままに書き綴ってきたが、周辺の調査が進めば雲岡古墳の明確な位置づけが可能となるであろう。その7世紀末という築造年代を想定するとき、古墳時代終末期から古代への墓制史の変遷を考える上で貴重であるばかりか、律令国家成立前夜の三

農平野の歴史を考える上でも欠くことのできない資料となりうるであろう。今後、県下の後、終末期古墳研究の発展とそれに伴って新たな視点から雲岡古墳の位置づけがなされることを希望して結語としたい。

(注)

- (1) 猪熊兼勝「横穴式石室の排水溝—岩橋千塚の場合—」(『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究紀要第2号、1967年)
- (2) 直宮憲一・「横穴式石室の除湿及び排水機能について—西摂地域の古墳を中心として—」(『横田健一先生古稀記念文化史論叢』(上)、創元社、1987年)
- (3) 寒川町教育委員会『中尾古墳発掘調査報告書』(1983年)
- (4) 高松市教育委員会『南山浦古墳群発掘調査報告書』(1985年)
- (5) 1986年に綾南町教委が調査を実施し、筆者が調査指導を行った。
- (6) 香川県教育委員会『長砂古遺跡』(『四国横断自動車道建設にともなう埋蔵文化財発掘調査実績報告』昭和61年度、1987年)
- (7) 観音寺市教育委員会『第4章、古墳時代』(『観音寺市誌』1985年)
- (8) 森岡秀人「追葬と棺体配置—後半期横穴式石室の空間利用原理をめぐる二、三の考察」(『関西大学考古学研究室開設参拝周年記念考古学論叢』1983年)
- (9) 上母神古墳群発掘調査団『上母神第4号墳発掘調査報告書』(1978年)
- (10) 前掲注(1)と同じ
- (11) 財団法人大阪文化財センター『陶邑田』(大阪府文化財調査報告書第30号、1980年)
- (12) 例えば千尋神社第4号、5号、6号墳、上母神第4号墳、長砂古墳等でみられる。
- (13) 前掲注(9)と同じ
- (14) 黒島林古墳群発掘調査団『黒島林第5・6号墳調査報告』(1977年)
- (15) 前掲注(9)と同じ
- (16) 亀田博「後期古墳に埋納された土器」(『考古学研究』23-4、1977年)
- (17) 長尾町教育委員会『前山古墳群調査報告』(1981年)
- (18) 山崎信二『横穴式石室構造の地域別比較研究—中・四国編—』(1984年度文部省科学研究費奨励研究A、1985年)
- (19) 前掲注(18)と同じ
- (20) 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」(『古代学研究』42・43合併号、1966年)
- (21) 豊浜町教育委員会『大木塚遺跡調査概報』(1985年)
- (22) 前掲注(20)と同じ
- (23) 前掲注(7)と同じ
- (24) 岡田清子「喪葬制と仏教の影響」(近藤義郎、藤沢長治編『日本の考古学V 古墳時代(下)』河出書房新社、1966年)
- (25) 野野正好「群集墳と古墳の終焉」(『古代の日本』5、1970年)

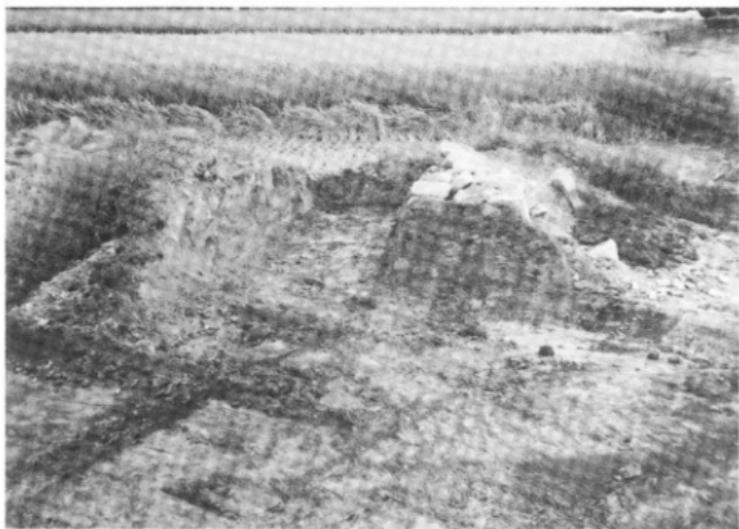
図 版

図版 1



(I) 古墳周辺の航空写真

図版 2



1. 古墳調査前(北西より)



2. 古墳調査前(南西より)

図版 3



(1)

(1) 石室検出状況全景
石室近景



(2)

図版 4



1. 石室奥壁



2. 石室側壁

図版 5

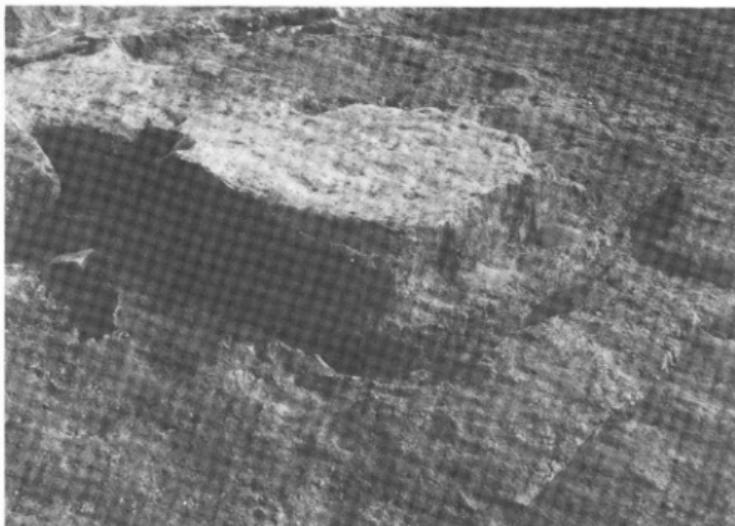


1. 碾床下遺物発見状況



2. 同碾床除去後

図版 6



1. 石室石組み除去後（北から）



2. 同 上

図版 7

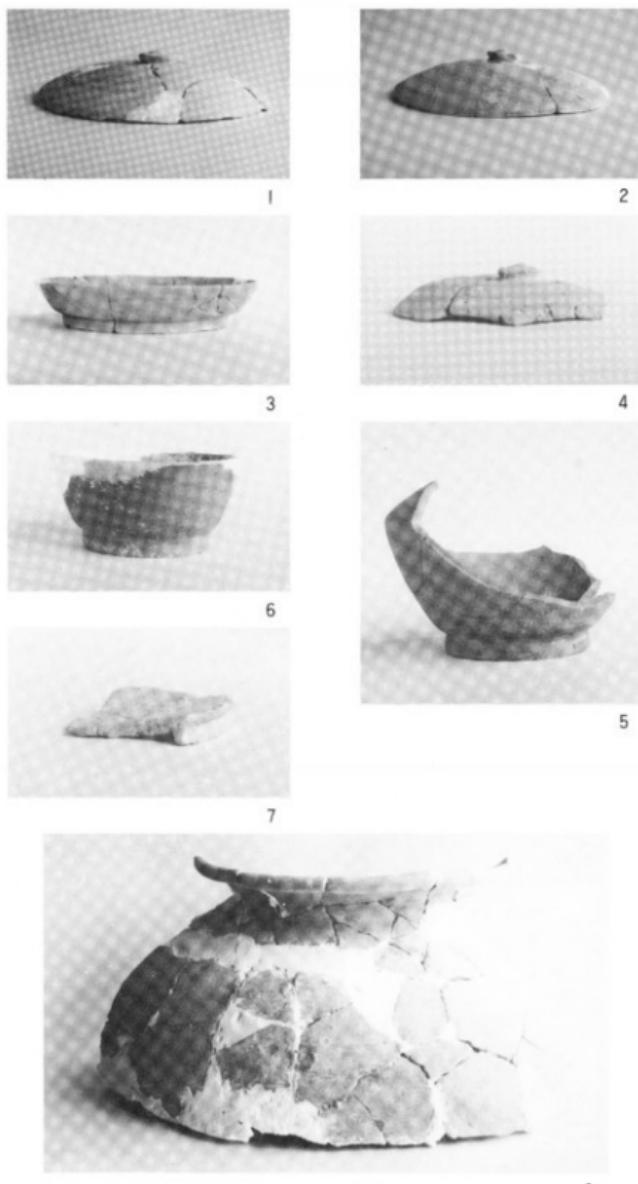


1. 周溝と全景（北西より）



2. 周溝と全景（南西より）

図版 8



雲岡古墳発掘調査報告書

発行日 昭和62年9月30日

編集・発行 豊浜町教育委員会

印 刷 石川印刷興業株式会社

